

キリスト教における「自由意志」
～神の前に自己決定は如何になしうるか～

奥村 諭

名列番号 203 学籍番号 0851020033

指導教員 足立英彦

平成 24 年 1 月 20 日 提出

論文要旨

「自由とは何か」「自由な意志決定とはどういうものを指すのか」といったことに関する議論は尽きない。本稿は、これらの議論に対して、キリスト教の立場からの回答を示すことを目標とするものである。

第一章では、アウグスティヌスの著作のうち、表題に「自由意志」という言葉が使われているものを紹介する。第二章において、キリスト教徒にとっての真実が記されているとされる聖書からの引用を行うことによって、キリスト教では自由意志が神によって与えられ、確かに存在していることを示す。続いて第三章で、キリスト教において自由意志について論じる際に排除することのできない神の恩恵というものが、どういったものであるかを説明し、第四章では恩恵が自由意志に先立って存在すること、及び自由意志による自己決定がキリスト教徒にとって望ましいものとなるためには恩恵が必要であることを、聖書のエピソードのひとつ「パウロの回心」を例に説明する。第五章では、人間の自由意志と神の支配力の関係に言及し、神は人間の自由意志を用いることはあっても、意志を捻じ曲げることはないことを示す。第六章において、自由意志に関してキリスト教徒の中に生じうる疑問・批判を提示する。第七章では、自由意志を二つの異なる位相に分け、そのうちのひとつを使うことで第六章の疑問・批判に対する応答をする。第八章において、第七章で使用しなかったもう一つの自由意志が、キリスト教において理想とされる意志の在り方であるということを述べ、第九章で、「自由意志」の意味についてのキリスト教による一応の回答を提示し、結論とする。

目次

はじめに

第一章 アウグスティヌスの著作

第二章 聖書に自由意志が示されていることの証明

第三章 神の恩恵

第四章 自由意志と恩恵の関係

第五章 人間の意志に対する神の支配力

第六章 アウグスティヌスの主張に対する疑問・批判

第一節 自由という名の強制

第二節 シメイは本当に自分の意志でダビデを呪ったのか

第三節 ダビデは報復した

第七章 第六章の疑問・批判に対する答え

第一節 二種類の自由

第二節 第六章第一節に対する答え

第三節 第六章第二節に対する答え

第四節 第六章第三節に対する答え

第八章 キリスト教における自由意志

第九章 結び

はじめに

「自由とは何か」「自由な意志決定とはどういうものを指すのか」といった議論は絶えない。神を唯一絶対のものとするキリスト教においても、自由は神と人との関係において多くの議論を引き起こしてきた。

キリスト教においては、神は人間を愛しているがゆえに、人間に対して、自らに関わることを自身で決定するための自由な意志を与えた、と考えられている。

神は、人間を自由な意志をもった存在として創造したのである。それは同時に、人間が神に背き罪を犯しうる存在となることをも意味していた。そのことは、全知全能たる神にはわかっていたことである。それにもかかわらず、なぜ神は人間に自由な意志を持たせ、罪を犯した場合には罰を与えたりするのだろうか。そんなことをするくらいならば初めから罪を犯さないような存在として創造すべきなのではないか。これはキリスト教徒であっても一度は考える疑問である。

この疑問に対し「神様のご計画は人間の知恵や知識を超越したものであり、人間に理解できるものではないのだ」と言って疑問を封じてしまうことは簡単である。しかしそれは思考の停止だろう。そこで、この疑問に答えるのが、聖人の一人である教父アウレリウス・アウグスティヌスの唱える自由意志論である。アウグスティヌスは西欧のキリスト教会をはじめ、西洋の思想・哲学に多くの影響を与えた人物である。

本稿では、アウグスティヌスの主張に基づき、キリスト教において人間に自由意志が確かに存在することの証明に始まり、自由意志と同様に重要であるとされている恩恵との関係を示す。そして、そこからキリスト教徒が抱きうる疑問・批判を導き出す。それに対して、キリスト教における「自由意志」には位相の異なる二つのものが存在する、というアウグスティヌスの指摘を利用して答えを示した上で、キリスト教が求める自由意志の在り方を提示することを目標とする。

第一章 アウグスティヌスの著作

アウグスティヌスの著作の中には、「自由意志」^{1 2 3}という、本稿の主題そのものといえる書物がある。これは、アウグスティヌスの初期著作に分類されるものであり、アウグスティヌスと友人エヴォディウスとの対話の形式によって議論が展開している。この作品は後にペラギウスが自説を擁護するのに用いられ、ペラギウス論争⁴と呼ばれる自由意志にも関わる論争の引き金となるものであった⁵。

¹ A. アウグスティヌス『アウグスティヌス著作集 3 初期哲学論集(3)』収録。

² 翻訳・論文などによっては「自由意志論」としているものもある。

³ 本稿では、アウグスティヌスの著書の訳は、『アウグスティヌス著作集』（教文館）に従う。

⁴ なお、論争といわれているが、この二人が直接出会ったという記録は残っていない。金子晴勇編『アウグスティヌスを学ぶ人のために』79頁。

⁵ 菊池伸二「アウグスティヌスにおける「意志の自由」—『自由意志論』を中心に—」名古屋

アウグスティヌスの著作において、他に表題に「自由意志」の言葉が使われているものとしては「恩恵と自由意志」⁶がある。これは先に挙げたペラギウス論争の中で、ある修道院内部で生じた対立と論争の解決のために書かれた作品である。この作品は「自由意志」とは異なり、対話形式ではなく、一種の説教のような形式で書かれている。

第二章 聖書に自由意志が示されていることの証明

アウグスティヌスは聖書から以下の箇所などを引用し⁷、聖書に人間の自由意志の存在が示されているとしている。

「誰も、自分が誘惑にあうとき、『わたしは神によって誘惑されている』といっはなりません。たしかに、神は悪へ誘う方ではありません。そのうえ、神ご自身はひとりとして誘惑なさることはありません。つまり、各々の人は自分の情欲によって導き出され、誘い寄せられるから誘惑にあうのです。次に情欲が〔人の同意を〕⁸受け入れたとき、罪を孕み、罪を生み出すのです。実に、罪は完成されたとき死を生むのです」(ヤコブ⁹1・13-15)¹⁰

『わたしが離反したのは主のせいだ』とあなたはいってはならない。主の憎まれることをしてはならないからである。『主自身がわたしを〔罪に〕引きずりこんだのだ』といっはならない。主は罪人を必要とされないからである。あらゆる汚れを主は憎まれ、主を畏れる人々はこのような〔汚れを〕愛することはできない。主ご自身は、始めに人間を創られ、人間を人間〔自身〕の思慮深い意志に委ねられた。あなたが欲するなら、あなたは〔命じられた〕掟と〔主の〕好まれることに対する忠誠を守るだろう。主はあなたの前に火と水を置いておられる。〔いずれか〕あなたの欲するものの方へあなたの手を差しのべなさい。人間の目の前に生と死があり、主は、〔いずれか〕その人の好む方を彼に与えられるであろう」(ベン・シラ¹¹15・11-16)

そのうえで、「あなたがたは、自分のために地上に宝を積もうとしてはならない」(マタイ¹²6・19)、「あなたのうちにある恩恵¹³を無視しようとしてはなりません」(Iテモ¹⁴4・

柳城短期大学研究紀要 第21号(1999年)99頁。

⁶ A. アウグスティヌス『アウグスティヌス著作集 10 ペラギウス派駁論集(2)』収録。

⁷ 本稿における聖書の訳は、原則として『アウグスティヌス著作集』(教文館)に従うものとし、異なる場合のみ脚注にて引用元を示すこととする。

⁸ 引用文中〔〕内、参考資料訳者付与。以下同。

⁹ ヤコブの手紙。本稿では、脚注における聖書書名は『アウグスティヌス著作集』(教文館)の表記に従う。

¹⁰ 本稿において、聖書箇所の引用は(聖書書名略号 章番号・節番号)で表記する。

¹¹ ベン・シラの知恵。「シラ書」とも呼ばれる書物。ユダヤ教とプロテスタント諸派では外典として扱われ、カトリック教会と正教会では旧約聖書に含めている書物のうちひとつ。

¹² マタイによる福音書。

¹³ 恩恵の辞書的な意味は「神からの人間に対する働きかけや神から人間への慈愛」である。

14) など多くの聖書箇所を引用し、これら神の忠告に従うためには人間の意志による努力が要求されるのだ、として、人間自らの意志による判断の余地を説き、自由意志の存在の証明¹⁵としている。¹⁶

第三章 神の恩恵

ここで、キリスト教において神と人間の関係において自由意志と同様に重要視される恩恵について述べることにする。

アウグスティヌスは、恩恵とは、人間からの何らの働きかけによらずに神によって与えられる賜物であるとしている。これについて、アウグスティヌスは以下の聖書箇所を根拠の1つとして挙げている。

「しかるに、われわれの救い主なる神の慈しみと人間への愛が[初めて]¹⁷顕れた時、神はわれわれの果たす義の業によるのではなく、神の御憐みに従って、再生の洗いと聖霊の更新を通してわれわれを救われた」(テトス¹⁸3・5)

アウグスティヌスは著書において「義の業」を「功績¹⁹」という言葉で表している。「神の慈しみと人間への愛(=恩恵)」というのは、功績によって与えられるものではない(すなわち人間からの働きかけによらずにあたえられる)ものであることを、アウグスティヌスはこの聖書箇所を引用して示したのである。

第四章 自由意志と恩恵の関係

アウグスティヌスは、恩恵というのは人間の自由意志を排除する目的をもって与えられるものではない、と述べている。恩恵によって人間の意思は悪いものから善いものへと変えられる、というのである。

また、前章でも述べたが、アウグスティヌスは、神の恩恵は人間の功績に応じて与えられるのではなく、始めに神から恩恵が与えられることによって人間は善い功績を得ることができる、としている。これは、人間が自由意志による自己決定(及びそれに伴う功績)をなすことの前提として、まず始めに神の恩恵が存在している、ということの意味している。これについて、アウグスティヌスが根拠の1つとしているのは、前章でも示したこの聖書箇所である。

「しかるに、われわれの救い主なる神の慈しみと人間への愛が[初めて]顕れた時、

¹⁴ テモテへの第一の手紙。

¹⁵ キリスト教において、「聖書に記されていること」は「正しいこと」である。

¹⁶ アウグスティヌスの唱える自由意志論は、決定論と自由意志を共に認めているといえるので、哲学における分類上は両立主義(柔らかい決定論)に該当するものである。

¹⁷ 引用文中 [] 内、筆者付与。以下同。

¹⁸ テトスへの手紙。

¹⁹ 本稿では、功績を「神にしたがう、自発的な行い」の意味で用いる。

神はわれわれの果たす義の業 [=功績] によるのではなく、神の御憐みに従って、再生の洗いと聖霊の更新を通してわれわれを救われた」(テトス 3・5)

これはつまり、恩恵は人間の善い功績に先行して存在している、ということの意味している。

また、この考え方は悪人が悔い改めて善人になる、というエピソードにも合致するものであるといえる。アウグスティヌスの提示するものとしては、パウロの回心がある。パウロは当初ユダヤ教徒としてキリスト教徒を迫害していたが、後にキリスト教徒となり聖人と呼ばれるまでになった使徒の一人である。パウロは自身について、

「わたしは神の教会を迫害したのですから、使徒と呼ばれるに相応しくありません」
(I コリ 20¹⁵・9)

と述べ、自らが罪にあったことを認めた上で、

「しかし、わたしが今 [使徒で] あるのは、神の恩恵によるのです」

と言って恩恵があったことを証言し、さらに、

「しかも彼 [=神] の恩恵はわたしにあっては空しくならず、わたしは彼ら [他の使徒] のすべてより働いてきました」(I コリ 15・10)

と、自らの自由意志が存在することも示している。

これらの聖書箇所を根拠として、アウグスティヌスは恩恵が自由意志に先行するということを主張している。

アウグスティヌスはまた、初めに恩恵が与えられた後には、人間の自由意志による自己決定(及びそれに伴う功績)は善いものとなってゆくが、それも常に恩恵によるものであり、恩恵から離れてしまった者の自己決定は悪しきものとなるといっている。

[神に対して]「わたしを助ける方であってください。わたしを見捨てないでください」(詩篇 27・9)

アウグスティヌスは、詩篇のこの箇所を引用し、人間は神から見捨てられたならば自らでは善い功績を成し得ないことを示していると述べ、自説の根拠の1つとしている。

第五章 人間の意志に対する神の支配力

アウグスティヌスは、「[この] 世の被造物 [としての本性] を保持しているこれら [人間] の意思は、神の支配力のもとにある」ため、「神はこれらの意志を、ご自分が望まれる時に、ご自身の望まれる方向へ傾くようにされる」²¹といっている。これは、神の掟に従う人間だけではなく、神に背を向ける人間も「神の支配力」のもとにある、ということを示している。

このようなことをいうと、「信仰があろうとなかろうと、結局は神に従わされるというこ

²⁰ コリント人への第一の手紙。

²¹ A. アウグスティヌス『アウグスティヌス著作集 10』79頁。

とか。それでは自由意志など存在しないということになるのではないかと考えてしまうかもしれない。

しかし、アウグスティヌスは上記の「支配力」は強制のためではなく、「ある場合には、あるものに特別の恵みを与えるためであり、ある場合には、他のあるものに罰を課すため」²²のものであると述べている。しかし、これだけではアウグスティヌスの謂わんとすることがわかりにくいので、著書に引用されている聖書箇所を参照する。

「王 [=ダビデ²³] は言った。『……かれ [=シメイ²⁴] に自由にさせておきなさい。呪わせておきなさい。主がかれにダビデを呪うように言われたのだから。それなら、誰が主に、『なにゆえにあなたはこのようになさったのですか』といえるであろうか』
(サム下²⁵16・10)

ここでシメイはダビデに呪詛の言葉を投げかけているが、これは決して、神がシメイの心を変えさせた（ダビデを恨んでいなかったシメイに恨みを持たせた）わけではなく、シメイが元々ダビデに対して抱いていた恨みが発露するように促したに過ぎない、というのがアウグスティヌスの考えである。このように、神は人の意志を強固なものにしたり意志の発現のきっかけをつくったりすることでその意志を神自身の計画に使うに過ぎず、意志に直接介入・変更することはない、ということをして、アウグスティヌスは「神はこれらの意志を、……ご自身の望まれる方向へ傾くようにされる」といっているのである。

また、サムエル記 下は以下のように続いている。

「また、ダビデは、アビシャイ²⁶と自分のすべての召使い等とに言った。『考えてみなさい。わたしの身から出たわたしの息子がわたしの命をねらっている²⁷。今それなら、このベニヤミンびと [=シメイ] としてなおさらだ。かれを許して呪わしておきなさい。主がかれに〔ダビデを呪うように〕言われたのだからである。それゆえ、主はわたしの〔耐えた〕侮辱を顧みてくださるかもしれない。また、この日のかれの呪いのかわりに、わたしに善いことを報いてくださるかもしれない』(サム下 16・11-12)

アウグスティヌスはこの箇所を「特別な恵み」をダビデに与えるための、神のダビデに対する試練であるとしており、「いかにして神が悪人たちの心でさえも善人たちの賞賛と援助のために利用されるかが証明される」といっている。

²² A. アウグスティヌス『アウグスティヌス著作集 10』79頁。

²³ 第3代イスラエル国王。

²⁴ イスラエル王国初代国王サウルの一族出身の男。サウル家を輩出したベニヤミン族の中には、ダビデがサウル王家を滅ぼしたという考え方があったようである。

²⁵ サムエル記下。

²⁶ ダビデの甥であり、家臣であった男。

²⁷ ダビデはこのとき、息子アブサロムの反乱を受け、逃亡中であった。

第六章 アウグスティヌスの主張に対する疑問・批判

アウグスティヌスの主張は一見、道理が通っているように見えるが、宗教の名の下に不条理が隠されているのではないだろうか。

第一節 自由という名の強制

神は人間の自由意志による選択を認めている。神の掟に従うも従わないも自由、というわけである。しかし、従わない者は救わないともいつている。これはあまりにも理不尽だと考える。

ガキ大将がクラスメイトに「俺の子分になるか、ならないか、自由に決めさせてやる。ただし、子分にならないならぶん殴るぞ」と言っているようなものである。ある種、究極の脅迫だといえなくはないか。

第二節 シメイは本当に自分の意志でダビデを呪ったのか

アウグスティヌスがいうように、神が人間の意志を傾かせることは自由意志を妨げるものではない、と断言してしまっただけで本当によいのだろうか。

神が人間の意志を傾けるというのは、人間の意図的な操作であり、誤解を恐れずにいえば洗脳に近いものであるとは考えられないか。

たとえば、ある人Aが何らかの理由でBのことを殺したいと考えていたとする。しかし、Aは当初は実際にBに何かするわけではなかった。しかしここで、AとBの関係をより悪化させたいと考えるCが、Aに対して、Bの悪口を吹き込むなどして、AがBをより一層嫌うように仕向け（AのBに対する意志を強固なものにし）、さらに殺すのに絶好の機会が訪れたとしたら、AがBを殺さないといい切ることはできないだろう。神がシメイの意志（ダビデに対する恨み）を強固にしたことでシメイがダビデに呪詛の言葉を吐いた、というのはこれと同じではないだろうか。

相手がそれと気づかないうちに、自分に都合の良いように思考を誘導する。これは十分に自由を阻害しているといえるのではないか。

第三節 ダビデは報復した

ダビデは、自身に呪詛の言葉を吐いたシメイを許す旨を述べた。

「……『……かれを許して呪わしておきなさい。主がかれに〔ダビデを呪うように〕言われたのだからである。それゆえ、主はわたしの〔耐えた〕侮辱を顧みてくださるかもしれない。また、この日のかれの呪いのかわりに、わたしに善いことを報いてくださるかもしれない』」（サム下 16・11-12）

すばらしい人格者のような言葉を言ったダビデであるが、死期が近づいたときに王子ソロモンに次のような遺言を残している

『……わたしは彼 [=シメイ] に『あなたを剣で殺すことはない』と主にかけて誓った。しかし今、あなたは彼の罪を不問に付してはならない。あなたは知恵ある者であり、彼に何をなすべきか分かっているからである。あの白髪を血に染めて陰府に送り込まなければならない。』」（王上²⁸2・8-9）²⁹

とても同じ人物の台詞とは思えないほどの手の平返しである。

自分が耐えることで神からの善い報いがあるだろうなどと言っておきながら、自分が死ぬ間際になって、息子に、シメイに対する報復を言い遺すのである。事実、この遺言によってシメイは後に打ち殺される（王上 2・39-46 参照）。

ダビデは確かに自ら手を下すことはなかったが、ダビデがシメイによる侮辱を耐えたとは言いきれない結末であり、「神が悪人たちの心でさえも善人たちの賞賛と援助のために利用されるかが証明される」というアウグスティヌスの主張の絶対性を欠かせるものであるといえるのではないか。

第七章 第六章の疑問・批判に対する答え

第一節 二種類の自由

前章における疑問・批判に答えるあたり、まず、キリスト教における「自由」についての考え方を示しておく。

アウグスティヌスは、著書「神の国」において次のように述べている。

「しかし、彼らが罪のうちにあって喜ぶことができないという事実は、彼らが自由意志を失ったということの意味するのではない。むしろ、意志は罪を犯す喜びから解放されて、罪を犯さないことの喜びへと強く向かう時のほうが、いっそう自由である。というのも、人間が最初に正しくつくられたときに与えられていた最初の意志の自由は、罪を犯さないことのできる能力であったが、しかしそれは罪を犯すこともできたのである。だが最後に与えられるそれは、罪を犯すことができないという点で、はるかに力のあるものである。これもまた神の賜物によるのであって、人間本性の可能性によるのではない。」³⁰

アウグスティヌスはここで、自由意志には二つの異なった位相³¹のものが存在する、ということを行っている。文中の「最初の意志の自由」と「最後の自由」がそれである。

「最初の意志の自由」というのは、ある選択肢について“自分の好きな”方を選ぶことができるということであり、我々が通常指すところの「自由」というものである。これは法律で例えるならば、「犯罪を行わない自由（善）」と「行う自由（悪）」の両方を選択でき

²⁸ 列王記上。

²⁹ 『和英対照聖書 和文／新共同訳 英文／Today's English Version』より引用。

³⁰ A. アウグスティヌス『アウグスティヌス著作集 15「神の国」(5)』376頁

³¹ 仲正昌樹『「自由」は定義できるか』190頁を参考にさせていただいた。

るという自由がある状態だといえる。

それに対して、「最後の自由」というのは「罪を犯すことができない」状態になることで、罪の苦しきから解放される [=自由] ことを意味する。法律で例えるならば、「犯罪を行わないという制約」を自らに課すことで「刑罰という苦痛」を回避する、ということになる。

キリスト教において「真に自由である」状態とは、「最後の自由」の状態のことをいっているのである。

そしてまた、この二つの“自由”が個々の人間の「自由意志」によって行使できることを利用することで、前章の疑問・批判に答えることが可能となる。

第二節 第六章第一節に対する答え

あくまで「神の掟に従う」という範囲内においては自由な意思決定が許されている、ということが重要である。

普段は意識していなくとも現代社会において人は法律に従って生きている。それは、法律という「ルール」に従うことに一定の価値（生命の安全など）が保証され、そこから外れた者には制裁が加えられる、ということが正しいとされているからである。

現代社会において、法律に従うこと＝正しいこと、という式が成り立つように、神の掟に従うこと＝正しいこと、という式が、世界の真理として成り立っていると（キリスト教においては）いえる。

従って、「正しいこと＝神の掟に従うこと」から外れた者を救わないということに疑問の余地はなく、道理にかなったものであるといえる。

第三節 第六章第二節に対する答え

第一節に対する答えと同じく、「神の掟に従う」ということがポイントとなる。

今、「神の掟に従う限りにおいては、自由である」という命題は、第七章より真であるといえる。この命題の対偶は「自由でないとすれば、それは神の掟に従わないからである」であり、これも真となる。

シメイは第七章の「最初の意志の自由」において神の掟に従わなかったのだから、キリスト教において自由が認められる状態にはなかったのである。

第四節 第六章第三節に対する答え

ダビデは確かにシメイに対する報復を命じたのであり、ダビデがシメイによる侮辱を耐えたとは言えないが、ダビデとシメイについての聖書箇所において、重要な点はそこではない。

ダビデの「主はわたしの〔耐えた〕侮辱を顧みてくださるかもしれない。また、この日のかれの呪いのかわりに、わたしに善いことを報いてくださるかもしれない」という発言

は、神の意志を示すものであり、その言葉自体が持つ意味が重要なものなのである、ということができる。

結果としてダビデがシメイに報復したか否か、神の報いがあったか否か、とは切り離して考えられるべきものであるといえる。ダビデの報復という事実は、神の意志とは別個のものとして考えられるべきものである。

第八章 キリスト教における自由意志

第七章第一節で示した「最後の自由」に身を置くことは、罪を犯すことで受ける苦痛から解放されることを意味する。それこそがキリスト教徒にとって「救われた」ということになるのである。このとき、キリスト教徒は「私は自由である」と言うことができる。罪を犯しうる存在から罪を犯すことのない存在へと向かおうとすることができる状態こそがキリスト教における自由であり、そのように願うことができる意志こそがキリスト教における「自由意志」であるといえる。

第九章 結び

本稿を執筆するにあたって、筆者自身がキリスト教徒ではないために、キリスト教における価値観や思想といったものを理解することが、最も苦勞したところであった。それでも、執筆を終えた今、以前と比べてキリスト教の考え方を知り、その思想に感嘆する点も多いと感じた。キリスト教神学に造詣が深い人から見れば、表面的な解釈であると感じられる箇所もあるかと思うが、前章までの議論から、キリスト教における自由意志というものについて「罪を犯す、という選択肢を失った意志こそが自由な意志である」ということを本稿における一応の回答とし、議論を終えようと思う。

最後に、本稿及びその元となったアウグスティヌスの「自由意志」論³²は、神の存在及びその神が絶対的な善であるというキリスト教における前提の下でのみ成立するものであり、その前提を受け入れない者との議論においては、その拠り所を失い意味を持たないものとなることをここに明記し、結びとする。

³² ここでは、特定の書物を示すのではなく、一連の著作によって示される、「アウグスティヌスの自由意志についての自説」という意味で用いた。

参考文献一覧

- 金子晴勇編『アウグスティヌスを学ぶ人のために』（世界思想社，1993年）
- 菊池伸二「アウグスティヌスにおける「意志の自由」—『自由意志論』を中心に—」名古屋柳城短期大学研究紀要 第21号（1999年）99頁～109頁
- 仲正昌樹『「自由」は定義できるか』（バジリコ株式会社，2007年）
- A. アウグスティヌス（泉治典・原正幸訳）『アウグスティヌス著作集 3』（教文館，1989年）
- A. アウグスティヌス（小池三郎・金子晴勇・片柳栄一訳）『アウグスティヌス著作集 10』（教文館，1985年）
- A. アウグスティヌス（松田禎二・岡野昌雄・泉治典訳）『アウグスティヌス著作集 15』（教文館，1983年）
- 和英対照聖書 和文／新共同訳 英文／Today's English Version（日本聖書教会，1998年）